

無保定採血によるレッサーパンダの健康管理

よこはま動物園 ○永井早紀

1 はじめに

レッサーパンダは、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストでは、EN(絶滅危惧種)に指定されており、国際種管理計画に則り、世界の動物園が協力し合って保全に取り組んでいる。公益社団法人日本動物園水族館協会もその取り組みに参加しており、当園も繁殖を目指す個体を1ペア有している。繁殖を成功させるためには、親となる個体が健康であることが必要条件であり、日頃から個体の健康状態を把握しておくことは重要である。

近年、多くの動物園館で、動物の健康管理のためのトレーニングが積極的に取り入れられている。これまで当園では、レッサーパンダの採血は体調が悪くなった際に捕獲下もしくは麻酔下で行われたものがほとんどであった。個体になるべく負担をかけずに日常的に健康チェックできるようにしたいと考え、定期的な無保定採血を行うことを目的として、トレーニングに取り組んだのでその経過を報告する。

2 トレーニングの経過

トレーニングを行う対象は、繁殖に関わるオス1頭(No.22)とメス1頭(No.19)とした。No.22は、2018年2月に東京都多摩動物公園から来園し、まずは当園の環境に慣れてもらうところからのスタートであった。来園当初から、担当職員と個体が同じ空間に入り、好物のリンゴを与えながら身体に触れるといった馴致は行っていた。同年5月上旬、獣医師とともに、動物舎の通路に台を置き、台に乗ったらリンゴを与えるというように無保定採血に向けたトレーニングを開始した。担当に十分慣れており、若くて柔軟な性格であり、リンゴへの執着心もあり、初日から獣医師が身体に触れることを許容した。しかし、その日は途中でリンゴを食べるのを止め、自分から自室へ戻ってしまった。その後も可能な日(1週間に1回程度)には獣医師とのトレーニングを行い、回数を重ねた。

初めは後肢から採血を行うことを考えていたので、台に座らせた状態で後肢を握り駆血するトレーニングを行っていたが、1 カ月ほど経過した後、前肢からの方が採りやすいかもしれないという獣医師からの意見があり、6 月中旬から台上に立位で前肢から採血するスタイルに変更した。そして、7 月下旬、初めて駆血した前肢に針を刺した。リンゴに夢中のNo.22 は針を気にする様子は全くなく、この方法で問題ないと判断できた。その後も同様のトレーニングを重ね、8 月中旬、初めて実際に採血を実施した。トレーニング時と同様、全く“採血”という行為を気にしない様子で、検査に十分な血液を採ることができた（図 1）。



図 1 採血中の様子

No.22 のトレーニング開始から少し遅れて、No.19 でも同様のトレーニングを開始し、9 月上旬、初めて採血に成功した。以降も可能な時に獣医師とのトレーニングを実施し、両個体ともに現在も継続して月一回、定期的に採血を行っている。

3 トレーニングから妊娠判定へ

No.19 に関しては、2018 年の冬にNo.22 とのペアリングに取り組み、2019 年 2 月に交尾が見られ、妊娠が期待されていた。レッサーパンダは偽妊娠という、実際に妊娠していなくても食欲が上がったり、乳房の膨張や営巣行動など、妊娠時と同様の特徴が現れることがある。妊娠と偽妊娠を判別することは難しく、実際に子供が生まれるか生まれないかわからないまま出産の日まで管理することになる。今回No.19 は、日頃からトレーニングで獣医師との関係づくりができていたことにより、神経質になる可能性のある妊娠期でも図 2 のような腹部の触診が可能であった。そこで、妊娠判定のため、2019 年 6 月上旬、エコー検査を実施した。その結果、胎児 1 頭の姿と拍動を確認できた。これにより、確信をもって出産までの飼育管理にあたることができた。2019 年 7 月 3 日、No.19 は仔を 1 頭出産した。残念ながら仔は未熟児で、3 日後に死亡した。病理検査の結果、心臓に先天的な異常があった可能性が高いことがわかった。

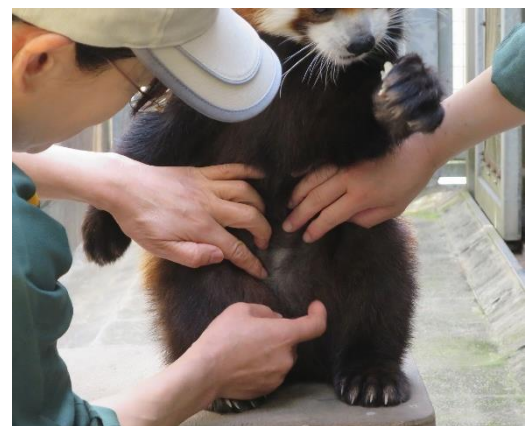


図 2 腹部触診の様子

4 おわりに

無保定採血を目的としトレーニングを行った結果、No.22、19 とともに 3 か月前後で成功することができた。

多くの野生動物において、血液検査の正常値は明確になっていない。また、与える餌の内容によって結果に差異が生じることが予想され、同じ動物種でも園館によって異なる可能

性がある。今後も検査結果を積み重ねていくことにより、当園個体の健康な状態（正常値）を把握していきたい。

また、トレーニングを行う中で築けた動物と職員の関係により、動物を怖がらせることなくエコーによる妊娠判定を行うことができた。昨年度のペアリングでは、仔を残すことができず、国際種管理計画に寄与することはできなかったが、今年度も引き続きこのペアで繁殖に取り組んでいく予定である。今後も日々の観察のほか、定期的な採血による健康チェック、トレーニングを通して動物と職員関係を維持していくことにより、個体の長期的な健康と繁殖に役立てていきたい。